

6月を迎え 1週間が経ちました。今月の 第3日曜日、21日は『父の日』ですね。5月の『母の日』に比べますと 何となく印象が薄いように思えてしまいますが、どちらも100年以上も前、アメリカの2人の女性達が それぞれに 生前の母親、父親の あふれる愛に対して 感謝を表わしたいと キリスト教会に提案し、礼拝を献げたことが 始まりです。日本で一般的な行事としては 歴史も浅く、1980年代になってからと言われています。

私事になりますが、私と父との別離は 8年前の冬の夜、あまりにも突然に 訪れました。その日の夕方まで いつもと変わらず 元気に仕事をし、普通に会話を交わしていたのに と父が 天国へ旅立ってからの毎日、しばらくの間、私は ひとりになると必ず 父を 想っては 涙していました。父自身も きっと まだまだ やりたいこともあったし、心残りに違いない。どんな時も常に 二人三脚で 共に歩んできた 愛する妻である母を置いて 先に逝くことも父にとっては 心配で 不本意だったはず。そして、わがまま放題で 甘えるだけの娘だった自分自身にも 自責の念しかありませんでした。親孝行を 何一つできないまま、ちゃんと “さよなら” が出来なかったこと、何より “今までありがとう” と感謝を伝えられなかった後悔に 心が 引きずられたまま、現実を受け入れられず、訳のわからない 憤りの思いで 恨み言のような お祈りを 来る日も来る日も 神様に向かって ぶつけていた 私でした。ところが、そんなある日のことです、父の 身の回りのものを 一つ一つ 整理している時に最後に着用した 背広の 内ポケットから、もう だいぶ くだびれた 黒い皮の 名刺入れが出てきました。それは なんと 十数年前の父の日に 私が 贈った 見覚えのある 懐かしいものでした。「まだ、使ってたんだ…」 「新しいのを プレゼントすればよかった…」 と使い込んで 角が丸くなり 少し型崩れした 名刺入れに 父の手の ぬくもりが よみがえり 思わず 目頭が 熱くなりながら そっと開いて たくさん名刺を 取り出しました。そして もう一度 今度は 反対側の中身を 確認しますと そこには、名刺と同じ大きさの、おそらく父が自分で 丁寧に 切って作ったと 思われる カードのような紙が一枚、入っていました。そこには、見慣れた 愛用の万年筆の 父の優しい字体で書かれた 一篇の詩が ありました。

『木にある時は 枝にゆだね、枝を頼れば 風にまかせ、地に落ちれば 土に眠る
神様に ゆだねた人生なら 木の葉のように 一番美しくなって 散れるだろう 』

これは 先月号でも 紹介させて頂きました、口筆画家の 星野富弘さん作の『木の葉』です。風に散り行く 枯れ葉を眺めながら、神様から 与えられて生かされている 人の命について その在り方に、安らかな思いと祈りを馳せた 心に深く染み入る 温かな詩だと 思いますが 父が 最期まで 肌身離さず ずっと胸に入れて 持ち歩いていた くだくたの 名刺入れから見つかった自筆のこの数行の詩は 父の生き様そのものであり 私達へのメッセージでした。父は 自らの命も 日々の様々なことも すべてを 神様の御手に ゆだねて 生きていたのだと その時から 心に覆われていた黒い雲が消え、悲しみの涙を流すこともなくなりました。紙の裏には、家族ひとりひとりの 誕生日と 記念の日、そして 右下に『感謝』の二文字が小さく 書かれてありました。「願い通りの生涯だったのだから 心残りなどしていないよ」と この詩を読むたび 大好きな父の 優しい笑顔が 浮かび 穏やかな声が 聞こえてきます。父が 残してくれた 小さな『遺言』は 今度は 私が 肌身離さず 大切に 持ち歩いています。そして どんな時も 父から注がれ続けた たくさん愛と 切なる祈りを 心に携えながら すべてを 神様の御手に ゆだねて、真っ直ぐに 歩んでいきたいと 心新たに 思っています。父の日を前に、感謝をこめて 世界中のお父さまへ 神様の祝福をお祈りします。(石田 記)